

電子本を作ろう！

高野敦志

目次

はじめに	1
ガリ版からインターネットへ	3
電子本との出会い	7
ePub3という規格	13
PDFの電子本を作る利点	22
コンテンツをどうするか	24
推敲について	31
電子本の作成	46
公開する際の注意点	61

61 46 31 24 22 13 7 3 1

はじめに

本書はインターネットで電子本を作る方法を、僕自身の持つ情報に基づいてまとめたものである。国際的な電子書籍の規格、ePub は当初、横書きしかできないものだったが、ePub3の規格からは、縦書きやルビなど、日本語特有の組み版が可能となった。

ePub は画面の大きさに合わせて1行あたりの文字数が変わえられるので、携帯端末などで読んでもらう場合に適している。その一方で、大抵のパソコンには Adobe Reader (<http://get.adobe.com/jp/reader/>) がインストールされており、レイアウトに凝りたい場合などは PDF が適している。また PDF の場合、実際に

印刷して製本することも可能である。

ePub を作る方法はいくつかあるが、HTML の知識が不要で、かつ初期投資の少ない方法として、ジャストシステム (<http://www.justsystems.com/jp/>) の「2012 太郎承」 (<http://www.justsystems.com/jp/products/ichitaro/>) で、電子本を作成する方法を紹介することにする。このソフトウェアを使用することで、縦書きやルビを実現した ePub や、固定した書式でファイルがやりとり可能な PDF を、ほぼ同時に作成することができるからである。

ここでは、電子本に関する基本的な情報を提示した後、文章を作成する上でのノウハウ、電子本の作成方法、その公開の仕方などを述べていく。

ガリ版からインターネットへ

作家の宮沢賢治は、自身の作品を謄写版とうしゃばん、いわゆるガリ版で刷って、配布して回ったという。ガリ版の発明自体、活字によらない印刷として画期的なもので、文集やパンフレットを安価で生産することを可能とした。新人類と呼ばれた世代が小学生だった一九七〇年代、学校の試験の多くは、まだガリ版を用いて作られていた。蠟引きした紙をやすり板の上に置き、鉄筆でカリカリ書いていく音は、父が教員をしていた僕にはなじみ深いものだった。

ワープロが発売されると、大学を卒業したばかりで余裕がなかったのも、妹と半額出し合って十数万円もする機械を購入した。活字に権威を感じていた世代の僕らにとって、自分の文章がすぐさま活字で表現されるというのは、まさしく夢のような喜びだった。

パソコンが普及し始めてからも、ワープロで作ったデータは無駄にはなっていない。ファイルの多くはプレーン・テキストの形で、パソコンに保存することができたからである。デジタルデータは場所を取らず、複製や変更が容易である。原稿用紙の余白がなくなるほど、推敲を重ねていた時代と異なり、デジタルデータでは推敲に伴う煩わしさは、大幅に軽減されることになった。語句の挿入や削除、文章の前後の入れ替えなど、簡単な操作で行えるようになった。

手書きの作家からは、ワープロやパソコンの文章では、推敲

の跡が残らない点などが批判されたが、もとの文章で気になる部分は、「断章」という形で別ファイルに保存しておく、推敲を重ねるうちに、元の文章を復元しなくなったら、「断章」からコピーしてくればいいだけの話である。また、当初、一般的だった文字コード Shift-JIS では、使用可能な漢字に多くの制限があったが、ユニコード・テキストによる保存を選択すれば、大概の漢字は表記できるようになった。

パソコンでの執筆が一般化するにつれ、推敲に推敲を重ねる際の負担が減るとともに、悪筆の原稿の判読に悩まされることもなくなった。コンピュータの普及によって、インターネットの時代が幕開けし、情報の発信はマスコミなど一部の組織が専有する権利ではなくなった。

インターネットの出現によって、個人が情報を発信できるようになると、わざわざ人間が配布して回らなくても、必要とする側がサーバー上の情報を、いつでもダウンロードできるようになった。インターネットの誕生が、グーテンベルクによる印刷術の発明に匹敵する影響を、人類に与えたと言っても過言ではないのである。

電子本との出会い

僕が初めて電子本に触れたのは、インターネット図書館のサイト「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>) においてだった。それはまた、『新潮文庫の100冊』などの電子本のソフトウェアが市場に出て、出版側の予想を超えた好評を博した時期でもあった。紙の本に対する魅力は捨てがたいものがある反面、インターネットの時代に、低コストで不特定の読者に、瞬時にして配信可能な電子本に、出版の可能性と将来性を感じた僕は、自分自身でも制作したいという思いに駆られた。

その電子本こそ、現在でも「青空文庫」からダウンロードできる「エクスパンドブック」だった。これは見やすいのに驚い

た。モニターの解像度を考えて、印刷用の本よりはフォントを大きくして、1ページあたりの文字数を制限している。もちろん、縦書きとルビもサポートしている。モニターが明るすぎないように、背景を黒とすることができるし、ページ自体も目に優しいように、淡い色がつけられる。表紙や目次も設定できるし、写真はもちろんのこと、ビデオも挿入可能である。しおりや検索機能も付いている。マウスでクリックすると、ページがめくられるときのような音までする。至れり尽くせり、といった感じである。

早速、僕は「エクスパンドブック」を作成するためのオーサリングツールを、ボイジャー社 (<http://www.voyager.co.jp/>) から購入した。結構値が張る物だったけれども。自分自身でホ

ームページを運営していた頃、デジタルの本が作れるこのソフトウェアで、いくつもの電子本ファイルを公開していた。

ただし、「エクスパンドブック」は、正式には WindowsMe までしかサポートしていない。すでに過去の存在と言っている。「青空文庫」ではいまだに多くのファイルがダウンロード可能となっているが、最近デジタル化された作品には、「エクスパンドブック」版はない。どんなものかご覧になりたい方は、OS が WindowsXP までなら、ボイジャー社 (<http://www.voyager.co.jp/software/ebdl.html#download>) から閲覧用のソフトウェアをダウンロードすれば開ける。Windows Vista や7などでは開けない。ただし、インストールされる場合は、自己責任で行っていただきたい。

WindowsXP 以降、「エクスパンドブック」は開発が止まり、先述したボイジャー社からは、後継のソフトウェアとして、T-Time (<http://www.voyager.co.jp/T-Time/update/index.html>) が発売された。当初、このソフトウェアはホームページを縦書き表示できるという触れ込みで、同社から販売されていた。また、サポートが切れた「エクスパンドブック」のファイルでも、文字情報に限っては開くことができた。現在では無料版はドットブック形式の電子本をパソコンなどに表示し、有料版はプレーン・テキスト TXT や HTML 文書を、携帯端末の大きさに合わせて、画像ファイルに書き出すソフトウェアとして販売されている。

画像であるということは、電子本の特長の一つである検索機能が、犠牲になっているということである。ただし、第三者によってテキストが流用される危険が小さく、出版社にとつては不安が少ない方法である。ボイジャー社のドットブックは、シヤープの XPDF 形式の電子本とともに、大手出版社の電子本の配布ファイル形式として主流になっている。

XPDF が広く流通している理由としては、ブニコビューア (<http://books.spacetown.ne.jp/sst/menu/xpdf/read/kishu.html>) というソフトウェアを用いれば、パソコンや多種の携帯端末で開ける点が挙げられる。XPDF のファイルを個人出版で用いるのは、かつてはコストの面で現実的ではなかったが、現在ではシヤープから、XPDF を作成するツール (<http://www.xpdf.jp/?tools/>) が、無償で提供されるようになった。

ePub3という規格

アップル社から iPhone や iPod touch、iPad が発売され、電子本の分野でも大きな変革が訪れるのでは、と期待されている。Sony から発売された読書端末 Reader は、先述したドットブックや XMDF の他、PDF や TXT、さらには ePub などにも対応している。また、Amazon の Kindle も第三世代からは、日本語のフォントを内蔵し、PDF 以外に TXT ファイルも読めるようになっていいる。

国際的な電子書籍に関する規格 ePub3 が発表され、日本語の縦書きやルビなど、日本独自のレイアウトもサポートされることになった。それとほぼ同時に、ジャストシステムから「一太

郎²⁰¹²承」が発売され、一太郎ファイルから簡単に、縦書きルビが表示で、写真などを挿入した ePub ファイルが作成できるとされた。僕が再び、電子本作成に興味を持ったのも、実は「一太郎²⁰¹²承」を購入したことと無縁ではない。

このソフトウェアを用いれば、縦書きルビの形式で写真などを貼り付けた一太郎ファイルが、瞬く間に ePub に変換されるので、レイアウトに用いられるタグ、すなわち、電子テキストの論理構造を表現する記号を知らなくても、容易に ePub の電子本が作成できるのである。

国際的な規格である ePub の利点の一つは、音声ファイルや PDF などと同様に、iTunes store から podcast (<http://www.apple.com/jp/itunes/podcasts/>) という形で、多くのユーザーに提示で

きるといふ点である。podcast は個人でも自作のコンテンツを、無料で配布できるシステムである。これはホームページで電子本を公開するよりも、はるかに多くの人々に自身の作品を見てもらうチャンスをもたらす。しかも、携帯電話の多くがスマートフォンとなり、半数近くが iPhone であることを考えると、若い世代のユーザーに作品を提示する絶好の機会と感じられた。

ただし、当初は不確定な要素もあった。ePub3への各社の対応には時間を要したからである。日本語のように縦書きを用いる言語が、少数派であることも関係していた。

二〇一二年十月末になり、状況に明るい兆しも見えてきた。アップル社が提供するアプリ、iBooks (<https://itunes.apple.com/jp/app/ibooks/id364709193?mt=8>) はアップデートして、バ

ージョンが3.0となり、ようやくePub3の縦書き表示に対応した。これは iPhone や iPod touch だけではなく、iPad にもインストールできる。フォントの大きさが調節でき、ページを指先でめくれるのももちろんのこと、縦書きのルビも表示され、内蔵の辞書との連携もでき、キーワードの検索も可能である。ePub 内の写真もきちんと表示されている。

その他に、紀伊國屋書店が提供している Kinoppy (<http://bookwebplus.jp/features.html>) は、パソコン以外に、iPhone や iPod touch、iPad、Android 用のソフトウェアが用意されている。無料で配布されており、Kinoppy (for iOS) なら、ePub 以外に PDF や TXT、ローコンロールされたような XMDF も

開けてしまう。

インフォステイ（株）が販売しているアプリ BREADER-青空文庫 (<http://itunes.apple.com/jp/app/breader-qing-kong-wen-ku/id411884081?mt=8>) は、iPhone・iPod touch 用で、「青空文庫」を読むためのアプリだが、縦書きの ePub はもちろん、横書きの ePub を縦書きで表示することが可能である。内蔵辞書との連携も可能で、ページ送りも紙の本をめくる感じにしたり、画面を自動送りにもすることもできる。PDF を携帯端末で読む際に、最適化した形で表示してくれる点も有難い。

ちなみに、BREADER-青空文庫は、「青空文庫」以外に、bookYARD (<http://www.byard.jp/book/index.html>) という電子本サイトからも、直接ダウンロードできる。このサイトには

ePub か青空文庫形式 (ZIP) のファイルなら、無料で作品を投稿することも可能である。

パソコン対応に限ったものとしては、Adobe Digital Editions 2.0 (<http://www.adobe.com/products/digital-editions/download.html>) がある。これは無料で配布されており、Windows 版も Macintosh も用意されている。

ブラウザで対応が進んでいるのは、Google Chrome ([http://www.google.com/webstore/detail/readium/fepbnnkkadjjahcafoaglimekeff#detail/readium/fepbnnkkadjjahcafoaglimekeff](http://www.google.co.jp/intl/ja/chrome/browser/?brand=CHMA&utm_campaign=ja&utm_source=ja-ha-apac-jp-)) と、タブレットオンを組

み込む必要がある。縦書きやルビに対応しており、ePubをライブラリで管理することができる。文字の色や大きさ、余白、背景なども調整できる。紙の本に近いレイアウトにする場合は、背景が白で文字を黒くし、表示形式を「ダブル」にすればよい。

ブラウザの Firefox (<http://mozilla.jp/firefox/>) に EPUBReader (<http://www.epubread.com/en/>) というアドオンを組み込んだ場合、現状は横書きにしか対応していない。縦書きで作った ePub も横書きで表示され、しかもルビがルビとして表示されず、本文にかっこなしで組み込まれてしまう。それを見た読者は、誤植だと思い込んでしまう恐れがある。

ちなみに、Internet Explorer は未対応であり、ePubをダウンロードすると、拡張子が zip になってしまうので、拡張子を epub

に変更しなければならぬ。こうした点などは、一般の利用者には分かりにくいだろう。

なお、電子書籍を読む専用の端末には、ソニーの Reader や楽天の Kobo Touch などがあるが、アマゾンの Kindle Paperwhite が最有力候補と目されている。アマゾンのユーザーなら、メールアドレスとパスワードの設定で、無料で提供されるクラウド上に、mobi 形式の電子書籍が保管できるからである。

Kindle が読み込む mobi 形式のファイルは、国際的な規格である ePub を、アマゾンが独自に拡張したものとされる。パソコンでダウンロードしたり、自作した、mobi ファイルはもちろん、pdf や txt などクラウドの指定されたアドレスへ、添

付ファイルの形で送信すれば、同期する形で Kindle に転送される。

ここで注意すべきことは、mobi ファイルは読書端末の Kindle で読むことが前提となっている、という点である。iOS 用アプリの Kindle では、縦書きのファイルでも、ルビが削除されて横書きに表示されてしまう。Kindle for PC も縦書き対応は不完全である。ただし、アマゾンからダウンロードした電子書籍は、たとえ価格が無料のものでも正常な縦書きが維持されている。

PDF の電子本を作る利点

では、新たにソフトウェアをインストールすることなく、誰でも見られる形式のファイルは、というと、大抵のパソコンには Adobe Reader がインストールされているから、PDF ならダブルクリックするだけですぐに読める。縦書きもルビも当然可能で、検索機能も付いている。写真などを組み込んで、凝った制作をした場合でも、PDF ならレイアウトは崩れることなく表示される。

PDF が電子本かという疑問をお持ちの方も多いたろうが、表紙をつけて最適化したレイアウトを施せば、立派な電子本として体裁を整えることができる。しかも、印刷することが可能

なので、少数でも引き受けてくれる業者に頼めば、数部を紙の本として製本することもできる。

なお、印刷した本とは違って、PDFを画面で見える場合には、フォントをやや大きめに設定し、各ページの大きさを小さくして、余白がグレーで表示されるようにするといい。まぶしさによる目の疲れを防ぐためである。これに関しては、電子本を作る方法を説明するときに、詳しく述べることにしよう。

コンテンツをどうするか

どんな電子本を作ろうとお考えだろうか。手持ちの文章を書きためていけば、エッセイ集とか旅行記や、自分史を残したいとか。中には自分の小説や詩集を発表したいとか、人それぞれ動機は異なるだろう。

ここでは、文章を中心とした電子本の作り方を考えていきたい。エッセイや小説の書き方は、他書に当たっていたかどうかにして、書く材料をどうすればいいかという、基本的な問題に限って考えることにする。

僕の場合、中学生の頃に、父に日記を書くように言われて、四十代後半となった今でも書き続けている。日記というものは、

型にはまらず自由に思索する上でもってこいである。ただ、コンピュータでプレーン・テキストの形で日記を書くようになったのは、まだここ数年であって、それ以前の記述はノートを読み返すしかない。今から日記を書くことなさっている方には、ぜひとも、デジタルの形で記録することをお勧めしたい。

その際、エディタでもワープロのソフトウェアでもいいから、ユニコードのプレーン・テキストで書くこと。Shift-JISでは、用いることができない漢字が多く出てきてしまう。写真を貼り付けられる日記のソフトウェアなどは、たとえ外觀が良くても使ってはいけない。OSが変わって開けなくなつては、それまで集めた情報がふいになつてしまふわけだから。

デジタル化した日記は、あなたにとつて、生きてきた証あかし

なる。語り合った際に心に残つた言葉、街角で見かけた美しい風景、旅先での出会いの一幕、何でもいいから、後で思い出せるように書き残しておく。この習慣を続けていけば、あなたの人生は過去から連綿と続く時間の流れとして、確実に心の中に刻み込まれ、その文を読み返すときには、かつての感動が現在の出来事のようによみがえってくる。人に見せる文章を書く前に、そうした習慣を身につけておくことが大切である。

あとはやりとりしたメールの一部でも、記憶に残したければ日記に貼り付ける。携帯端末で書いたメモは、メール経由でパソコンに移動させ、日記を書くときに推敲すればいい。すぐに役立たなくても、アイデアは確実に集積していく。

何かのテーマで文章を書きたくなったら、エディタやワープロの検索機能を用いて、日記のキーワードを順にたどっていく。その語が含まれた文を見渡して、書こうとしている文章の全体を思い描いてみよう。

ただし、パソコン上の日記は、まだ人に見せられるような代物ではない。膨大な文章の中で使える部分は、ごくわずかである。また自分では理解していても、いきなり本題からでは、読者に理解してもらえないこともある。日記とは別に、人に見せるための文章も書きためていった方がいい。

それがブログである。多くの人はブログを、単なる日記と取り違えている。うちの子どもが運動会で一等賞になったとか書いても、喜んでくれるのは身内かせいぜい友人だけである。第

三者にはあまり関心がない。facebook (<http://ja-jp.facebook.com/>)に僕が乗り気でないのも、それが人間関係を構築するには役立っても、書かれている文章自体は、読み返すに値しないものがほとんどだからだ。

個人で書く日記は単なる素材に過ぎず、そこから文章になりそうな部分を抜き出し、一つのエッセイなどに膨らませていけばいいのである。日記をつけることと、ブログを書いていくこと、これをあなたの日課にしていくといい。

では、ブログを始めるとして、どんなサービスを選ぶべきかという点、podcastに対応していて、アクセス解析ができるサイトが望ましい。その条件に合致しているのが、Seesaa

(<http://blog.seesaa.jp/>)のブログである。無料で続けられるし、書いた文章に毎日どの程度アクセスがあるか、確認できるからである。それによつて、どんなテーマに関心が持たれているか、どんな文章が好評をもつて迎えられたかが分かる。

無料の情報発信とはいへ、文章を書くことを人生の中枢に据えていきたいなら、ブログは文章修業の実践の場だと考えられる。テーマによつては、読者からの反応も得られるし、アクセスが増えていけば、新たな文章を書く励みにもなるからである。ブログはテーマ別に分類可能であるから、複数のジャンルに文章を分けて登録するといひ。ブログに載せたものは、アップロードすること、ジャンル分けした形でエディタやワープロに保存しておくこと。これを怠ると、せつかくのブログが書き

つばなしになる恐れがある。

文章を書きためたところで、電子本を構成するに足る文章があるか、特定のジャンルのものを確認する。例えば、あるテーマのエッセイ集を出すとしたら、何が足りないか考え、全体の構成を思い描いた上で、補うべき部分を日記で下書きし、推敲したものをブログで発表する。

章立てが決定した段階で、ワープロかエディタで空のファイルを作成し、予定した章ごとに貼り付けてみる。全体を読み直して、不足した部分を書き足していき、重複した部分を除いて、全体の調和を図るのである。

推敲について

推敲は気の済むまで行った方がいい。説明不足の点はないか、同じ内容が重複していないか、文が冗漫すぎないか。書いた文をすぐに人に見せるのではなく、最低一日おいて読み返した上で書き直すと、自分の文章の欠点を見つけやすい。また、声に出して読んでみると、文章上のリズムをつかむ感覚が得られる。文章を推敲していく際のこつについて、詩人で仏文学者の窪田般彌はんや先生に教えていただいたことがある。それは類語辞典を用いるということだった。どうしても的確な言葉が見つからないとき、類義語から目当ての表現を探し当てることができるからである。僕は早速、角川書店の『類語国語辞典』を買った。

これは後述する『角川類語新辞典』を増補したものである。

類語辞典は物書きには必須の辞典だが、実際に考えながら書いている(キーボードを打っている)ときには、紙の辞書を引いたりしてしていると、思考の流れが途切れてしまう。的確な言葉が頭に浮かばないと、文が続かないような折でも、ゆっくり辞書を引いてはられない。

そんな場合には、ソフトウェアとなった辞書が便利で、とりわけ、ワープロソフト「一太郎」に付属しているatok(<http://www.atok.com>)の連想変換という機能が有効である。これはキーの操作だけで、類義語が列挙されるわけだから、これほど便利なものはない。atokには『日本語つかいさばき辞典』が付属しているが、『角川類語新辞典』(<http://www.justsystems.com>)

com/jp/products/kadokawa/)もオプシオンでインストールできる。両者は相互補完の関係にあり、一方にしか出てこない類義語がたくさんある。なお、後者の方が語釈が丁寧で、例文などもついているので、atokの連想変換の機能をフルに生かすには、『角川類語新辞典』のインストールが必須だと思われる。

さらに「一太郎²⁰¹³」のプレミアム版を購入すれば、複数のATOK用辞書『大辞泉』『角川俳句歳時記』『ジーニアス英和』和英辞典』など、単体なら高価な電子辞書が付いており、ATOKの「連想変換」に組み込まれることで、これらの辞書の語釈も加わる。

さて、ソフトウェア化された類語辞典は、他にもいろいろあ

る。学研から発売されていた『Super 日本語大辞典 全 JIS 漢字版』（生産終了）には、簡単なシンソーラスがついているから、たいていはこれで間に合ってしまう。『明鏡国語辞典』（http://www.logovista.co.jp/LVERP/shop/ItemDetail.aspx?contents_code=LVDTS03010）にも類語・関連語の項目があるが、この手の物で最大規模の収録語数を誇るのが、PC用のロゴヴィスタ版『日本語大シンソーラス』（http://www.logovista.co.jp/LVERP/shop/ItemDetail.aspx?contents_code=LVDTS05010）である。

これは膨大な語や慣用語が収録され、古典からの引用も多いので、購入を覚えておられる方も多だろう。書籍版は重すぎから、書棚のインテリアになるのが落ちである。iPhoneなど

をお使いなら、iTunes Store から iOS 版 (<http://itunes.apple.com/us/app/ri-ben-yu-dashisorasu-1ei/id313344728?mt=8>) も買えるけれども、他の辞書との連携ができない。もし迷っておいでなら、PC用のロゴヴィスタ版をお勧めしたい。

ところで、この『日本語大シソーラス』の編者、山口翼氏は言語学者ではない。小説を書くために、自分の語彙を増やそうとして、用例をかき集めているうちに、それが稀代の大シソーラス編纂へと結びついたというのである。中国の古典から俗語に到るまで、引用された表現の多様さには目を奪うものがある。収録されたものをざっと眺め渡すだけでも楽しい。文章を練り上げていく過程で、どうしても的確な表現や慣用句が見つから

ないときなどに、心強い味方になると思った。

ただし、問題点がないわけではない。PC用の『日本語大シソーラス』は、普通に言葉を入力して類義語を探そうとしても、その言葉がヒットしないことが多いのである。その点が『角川類語新辞典』などとは大いに異なる。では、どうやって引いたらいいか。

Logovista 辞典ブラウザを用いる場合、検索欄に何も入力せずに「メニュー検索」をクリックすると、「トップメニュー」が現れる。これは国立国語研究所の『分類語彙表』(<http://www.ninjal.ac.jp/products-k/kanko/goihyo/>) に基づく分類である。「抽象的關係」「位相・空間」「序と時間」といった大分類が現れる。「抽象的關係」をクリックすると、「関係がある」「関係が

ない」「影響」といった中分類が現れ、さらに「関係がある」をクリックすると、小分類の「関係ある」「縁がある」「縁続き」などが現れ、その下位に実際の類義表現が列挙されているのである。推敲している折などには、この方法での確かな言葉を探していけばいい。

ちなみに、推敲する際に音読する代わりに、コンピュータに読ませるという方法がある。かつては実用とはほど遠い水準だったが、「二太郎²⁰¹³」のプレミアム版を購入した場合、文章を読み上げる機能「詠太3」を利用するのもいい。それがどの程度のものであるか、ネット上のデモンストレーション (<http://www.justsystems.com/jp/products/ichitaro/feature8.html>)

で確認してみるといいだろう。

男性1名、女性2名の声の中から選択し、話すスピードも調整できる。自分が書いた文章を読ませてみると、耳で聞いて快い文章であるかどうか分かる。練り上げた文章なら、他人に読んでもらったような印象を受ける。

ルビがついている場合も、ルビの部分だけ正確に読んでくれる。ルビの表記については、印刷する場合は、拗音の母音部分も大きい字で表記するのが通則である。ただし、読み上げ機能を使用する場合は、拗音の母音部分は手書きのように、小さい字で入力するようにする。実用レベルに達していることは確かで、発音が複数ある漢字や、固有名詞などで読み間違えることはあっても、イントネーションもおおむね共通語に則っている。

推敲のほかにも、「詠太」に他人の文章を朗読させてみよう。IE用のプラグインを有効にして、ネット上のニュースを読ませてみるといい。アナウンサーに読んでもらっているようであり、疲れているときに耳でニュースを確認することができる。

「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)の文学作品は、新仮名でルビなしのテキストを、「一太郎」²⁰¹³に貼り付けて読ませるといい。HTMLファイルのままだと、漢字の発音とルビの部分が重複して読まれてしまう。ルビを一太郎形式に変換する「一太郎」用のマクロ「ルビ付与(青空文庫に対応)」(<http://www.sakai.zaq.ne.jp/necessity/>)も公開されているが、使用する場合は自己責任で行うことになる。でなければ、手作

業が必要となるが、「青空文庫」のファイルの一部は、すでに「一太郎」ファイルに変換され、「一太郎」で『青空文庫』(<http://www7.plala.or.jp/hongming/>)で公開されている。旧仮名遣いの作品だと、期待通りに読んでくれないのは言うまでもない。

最後に、「詠太」に正確に読ませるための方法について、補足しておくことにしよう。「詠太」も「一太郎」²⁰¹³でバージョンアップされ、読み上げの精度をさらに高める機能として、「CSV」ファイルから辞書への一括登録が可能となった。一つ一つの単語を登録するのが煩瑣な場合、ATOKなどのIMEに登録されている語を、登録することも可能である。

ただし、ATOKと「詠太」とでは、用語や分類の基準が異なり、単語と読みの表記、項目の提示順序など、さまざまな違いがあり、自動で変換することはできない。まずは、「詠太」の「辞書作成ツール」を確認しておくといい。人によって環境が異なるので、一つ一つの手順を示すことはできないが、その人なりに解決するヒントを、以下に説明していくことにする。

ATOKの「メニュー」から、「辞書メンテナンス」「辞書ユーティリティ」を起動する。次に「ツール」から「単語・用例の一覧出力」をクリックする。登録可能な例は5000程度である。「単語出力」のタブで、「Unicodeで出力する」にチェックを入れ、単語種類は「登録単語」に限る。対象品詞は「設定」で固有名詞などを選択する。「単語コメント情報を出力する」にはチェックを入れない。「ファイル名」を入力して「実行」をクリックする。

出力されるのは、「テキスト」ファイルである。これをCSVファイルに変換するには、エディタなどで開いた「テキスト」を「全部選択」して、Excelに貼り付けて、CSVファイルとして保存し直す。

「詠太」の「辞書作成ツール」では、1列目が「単語」で、2列目が「発音」、3列目が「品詞」、4列目が「動詞の活用」である。4列目に関しては、動詞に限って「1段活用」か「5段活用」か記入し、それ以外の品詞の場合は空欄にしておく。

この順序にしたがって、ATOKの「単語・用例の一覧出力」から作成されたCSVファイルの「列」を、入れ替えていくの

である。

Excelの「列」の順序を変えるには、「列」の挿入を行った上で、該当する「列」をすべて選択して、挿入した「列」に移動した後、不要となった「列」全体を削除する。

ATOKから出力したファイルの読みはひらがなだが、「詠太」に登録するにはカタカナに変換しなければならない。「発音」の書かれた「列」をすべて選択して、エディタにコピーした上で、「ひらがな」をすべてカタカナに変換する。この機能を持つソフトウェアには、例えば QX エディタ (<http://www2k.biglobe.ne.jp/~araken/>) がある。カタカナになったところで、Excelの「発音」の列にコピーするのである。

品詞の名称も ATOK と「詠太」とでは異なるので、「一太郎」

の「置換」機能で「1つずつ確認しながら置換する」のチェックを外して、一括して「詠太」の用語に置換する。または、エディタの「変換」の機能を用いて、一括して置換するのである。例えば、「固有人姓」↓「姓」、「固有人名」↓「固有人他」↓「名前」、「固有地名」↓「地名」、「固有組織」↓「企業名」、「固有商品」↓「固有一般」↓「その他の固有名詞」といった具合に一括して置換する。

作業がすべて終わったら、「詠太」の「辞書作成ツール」で作成した CSV ファイルを読み込む。これで追加した語が「詠太」によって正確に読まれるようになる。

その後、「詠太」の「辞書作成ツール」から、単語や複合語などを追加したくなるかもしれない。例えば、「東海林」とい

う「姓」を登録する場合、長音を含むので、通常の表記である「ショウジ」ではなく、発音通りの「シヨージ」で登録する。「値が張る」のような慣用表現は、「動詞」の「5段動詞」として登録する。作業をが終わったなら、「エクスポート」して、CSVファイルの更新を行っておく。

ただし、「入る」のように、「はいる」と「はいれる」という複数の読みが、文脈によつて決まる場合、いくら登録しても、「詠太3」では対応できないようである。ルビをつければ、この種の読み違いは防げる。

電子本の作成

ジャストシステムの「一太郎²⁰¹²承」、または「一太郎²⁰¹³玄」で、電子本を作る際の留意点について、僕が気がついた範囲で記すことにしよう。電子本として配布するファイル形式としては、podcastで配布することを考え、ePubとPDFの二種類を用意する。「一太郎²⁰¹²承」では、いずれのファイル形式にも変換して保存できる。さらに、「一太郎²⁰¹³玄」ではアマゾンの読書端末、Kindle Paperwhite用のmobi形式にも変換可能になった。

iPhoneやiPod touchなどの携帯端末で閲覧してもらうには、ePubがふさわしい。一方、パソコンで見るとはPDFが最適である。ここでは、一太郎ファイルから両方のファイルを、効

率よく作る方法を紹介しよう。なお、Kindle の mobi 形式については、podcast ではなく、自分のブログで公開するか、アマゾンで販売することが前提となる。

もし「一太郎²⁰¹²承」か「一太郎²⁰¹³玄」をお持ちなら、作業を始める前に「JUST オンラインアツプデート」で、ソフトウェアを最新の状態にしておくこと。次に、「一太郎²⁰¹²承」なら「ナビ」「よく使うテンプレート」「テンプレートを開く」から「EPUB」を選択する。「一太郎²⁰¹³玄」なら「ファイル」「テンプレートを開く」から「EPUB」を選択する。どんなスタイルがあるか、ざっと目を通してレイアウトを考える上でのヒントにする。

ただし、ここでは PDF も同時に作成することを考え、テンプレートは使わないことにする。「ヘルプ」に epub と入力して、「EPUB 形式の電子書籍を作成するテクニク」の項目を読んでおこう。ここでは PDF も同時に作るので、テンプレートは使わないことにする。Adobe Reader で PDF を表示する際に、「エキスパンドブック」と同様のレイアウトにするために、「文書スタイル」を以下のように設定する。

用紙 A 5 単票・横方向

文字組 縦組

字数 1228.0 字

行数 1 行

字間 1 %

行間 50%

余白は上端と下端が14 mm、左右が16 mm、中央が25 mm。

フォント MS明朝 12ポイント

本文は「一太郎^{2012承}」や「一太郎^{2013玄}」に打ち込んでおく。エディタで文書を管理している場合には、テキストを流し込んでから、必要に応じてルビなどを振っていく。ここで注意しなければならぬのは、「改ページ」と「目次」である。

まず、「改ページ」について述べる。各章の終わりなど、余白を残して強制的にページを変えるには、「改ページ」のマークを打ち込んでおく必要がある。

あらかじめ「改ページ」したいページに移動しておく。「改ページ」は「挿入」から「記号リーダー\スペース」、「改ページ」とたどっていく。「改ページ」する直前のページの最終行にカーソルを置いてクリックすると、「改ページ」のマークが入る。次のページが1行ずつずれるので、適宜調整するといいい。「改ページ」のマークを打ち込むことは、pdfで電子本を作る場合は重要ではないが、epubでは必須である。

次に、「目次」についてだが、epubで有効にするには、「一太郎^{2012承}」で目次の設定をしなければならない。単にリンクを張るだけでは、目次として機能しないということである。

具体的な方法を以下に述べる。本文をすべて打ち込んでしまったら、目次にするために1ページ（または必要なページ数）を空けておく。「ファイル」「文書スタイル」「スタイル」とた

どり、「ページヘッダ・フッタ」のタブをクリックし、「ページ番号詳細」をクリックする。ePub の場合なら、「目次用ページを使用する」で1ページ（または必要なページ数）と設定する。pdf の場合には、それ以外に「表紙用ページを使用する」の項目も設定しておく。

本文内の章のタイトルを選択したら、「ツール」「目次索引」「目次設定解除」とたどり、「目次1」が選択されているのを確認して「OK」をクリックする。各章のタイトルに関して、これを繰り返ししておく。その際、「挿入」「ブックマーク」「カーソル位置をブックマークに追加する」とたどり、各章のタイトルに「ブックマーク」も設定しておく。

目次に設定したページに戻り、「ツール」「目次索引」「目次作成」までたどり、「目次1」のタブに関して、「目次にする」にチェックが入り、「ページ番号位置」が「付けない」になっているのを確認した後、「OK」をクリックすると、目次用のページに赤い破線に囲まれた各章のタイトルが現れる。その直前の行に「目次」と打ち込み、レイアウトを整える。

この目次の設定がないと、ePub では有効なリンクが生成されないのである。これで準備が整ったので、目次のページに移動し、目次内の各章のタイトルを選択し、「挿入」「ハイパーリンク」とたどり、「作成／変更」をクリックし、「ブックマーク」の「一覧」をクリックし、リンクを張りたい「ブックマーク」を選択する。あとは、その繰り返しで、目次の各項目と各章をすべてリンクしていけばいい。

本文にハイパーリンクを張りたい場合には、「挿入」「ハイパーリンク」「作成／変更」をクリックして、URLを記入する。

別途、表紙などのファイルも、フォトレタッチツールなどで加工しておく。大きさは縦1024px、横724pxにしておく。なお、画像の著作権には注意すること。テキストのフォントは、パソコンに付属しているMS明朝かMSゴシックに指定しておく。明朝体の方がきれいだし、WindowsXPの場合には、ユニコードの一部の文字が、ゴシックだと表示されない可能性がある。インデントの設定は可能である。

画像は1ページに一枚に限ること。画像の説明文を含んだ画像を作るようにしておく。というのも、画像の下に説明文を文字として記入した場合、PDFでは問題なのだが、ePubだと

画像と説明文が別ページになったりして、非常に見栄えが悪くなってしまうからである。説明文を画像に組み込む際には、フォントによってはJPEGに変換すると摩滅してしまうので、フォントを太めにするなど調整する。

ePubで写真集などを作るのはお勧めできない。画像の配置がアンバランスになったり、ソフトウェアによっては文中に表示されなかったりするからである。ただし、「一太郎2013²¹」では、端末に合わせて形を変える「リフロー」に加え、漫画などのための「固定レイアウト」にも対応した。

画面の小さい携帯端末では、表示する文字数を微妙に調節できる「リフロー」が便利である。文字情報のままなので、辞書アプリで分からない言葉を指定すれば、簡単に調べられることもで

きる。一方、写真集や漫画などは「固定レイアウト」にしないと、期待される効果が損なわれてしまう。ただし、画像化されているので、意味を調べたい場合は、辞書アプリを起動して、言葉をいちいち打ち込まなければならぬ。「固定レイアウト」では、画像の種類や画質、サイズなども調整できる。とはいえ、「固定レイアウト」の ePub を作るくらいなら、PDF を用いた方がいいのではないかという疑問も生じる。

全体のチェックが終わったら、一太郎ファイルを ePub 形式で保存する。「EPUB 保存」をクリックすると、「EPUB ファイルのプロパティ」が現れる。「タイトル」「作成者」を記入し、言語は「日本語」を選択する。「表紙」をつける場合には、準備しておいた画像ファイルを指定する。「キーワード」は半角

カンマをはさんで指定する。「説明」を短く書いた後、「発行者」「著作権」も自身の名前を記しておく。ISBN は販売するときのコードだから空欄にしておく。「作成日」「発行日」「更新日」は自動で入っているだろうから、「保存」のボタンを押せば、十秒程度で出力される。パソコンと携帯端末で表示されることを考え、先述した ePub 関連のソフトウェアで開いて、表示を確認しておくこと。

次に、「一太郎²⁰¹³」で Kindle の mobi 形式に変換する方法を述べる。ePub と異なる点を言えば、目次のページを作成せずに、各章のタイトルを選択し、「目次設定」するにとどめておくという点である。目次自体は Kindle 用が自動で生成される。

一太郎で目次のページを作成してから mobi に変換した場合、一太郎が設定した目次と、Kindle 用の目次が重複するという不具合が生じる。

原稿のチェックを終えたら、一太郎ファイルをもbi形式で保存する。「mobi 保存」をクリックすると、「Kindle/mobi ファイルのプロパティ」が現れる。「タイトル」「作成者」を記入し、言語は「日本語」を選択する。「表紙」をつける場合には、準備しておいた画像ファイルを指定する。「種類」は「リフロー」を選択し、「キーワード」は半角カンマをはさんで指定する。「説明」を短く書いた後、「発行者」「著作権」も自身の名前を記しておく。ISBN は販売するときのコードだから空欄にしておく。「作成日」「発行日」「更新日」は自動で入っている

だろうから、「保存」のボタンを押せば、十秒程度で出力される。

なお、「一太郎²⁰¹²承」の場合には、ePubを作成した上で、Kindleプレビューツール (<https://kdp.amazon.co.jp/self-publishing/help?topicId=A3IWA2TQYMZ5J6>) の Kindle用の mobi ファイルに変換できる。また、すでに ePub ファイルを作成していて、それを mobi に変換したい場合も、プレビューツールを利用すればいい。Kindle 用の目次は表示されないが、一太郎で作成した目次は、Kindle 上でもリンクが有効である。いずれにしても、Kindle Paperwhite に正しく表示できるか確認するため、同ツールは事前にインストールしておいた方がいい。

最後に、PDF を作ることにする。ePub を作成した時の一太郎ファイルを、PDF 用に別名で保存し直す。「文書スタイル」は基本的にはそのままでもいい。

PDF では1ページ目に、表紙となる画像を貼りつける。「目次」のページは、基本的に ePub で作成したままでいいが、リンクが有効となっているタイトルの真下に、ページ数を半角数字で書き加えればいい。

ページ数を記入してしまったら、目次のページ全体を選択して、「書式」「文字割付」「縦中横一括設定」とたどり、「行の幅に収める」にチェックを入れて、「対象文字数」を設定すれば、三桁のページ数でも縦に表示されるようになる。チェック

を終えたところで、PDF の形式で保存すればいい。

なお、ePub や mobi、PDF でも言えることだが、実際にインターネットで公開する場合には、ファイル名は半角のローマ字で表記しておいた方がいい。

公開する際の注意点

実際に電子本ができたなら、とりあえず、Seesaaのサイトにアップロードしてみよう。作った電子本を実際に第三者に見てもらうのである。また、多くの電子本がアップロードされているサイトに登録するという方法もある。ただし、コンテンツが豊富なサイトでは、かえって自分の作品が目立たないことになり、意外にダウンロードしてもらえないものである。

有料で売り出そうなんてやめた方がいい。ポルノとかハウトゥ本なら分らないが、小説やエッセイはプロのものでなければ、金を払ってもらえないだろう。とにかく読者に目を通してもらい、評価を仰ぐのが先決である。

もしある程度、自信がある作品ができれば、iTunes Storeのpodcastに申請してみよう。Seesaaにアップロードした電子本を、アップル社に審査してもらおうのである。注意点はアップル社の「よくある質問：podcastを作るには」(<http://www.apple.com/jp/itunes/podcasts/creatorfaq.html>)のページで確認する。過激な性や暴力の描写があると、却下されるかもしれない。許可された場合には、数日以内にメールで連絡が来る。

iTunes Storeのpodcastにスペースがもらえたら、月に最低一回以上新作をアップロードしていく。正式に登録されれば、日本だけではなく、欧米や中国、韓国のサイトからも、podcastのリンクが張られる。一定のダウンロード数を確保するように、Twitter(<https://twitter.com/>)などで宣伝していく。

ファイル形式としては、作成した ePub と PDF の二種類を用意するわけだが、忘れてはならないのは、Seesaa で電子本を公開するとき、ePub と PDF をアップロードする日を別にすると、ということである。同じ日のブログに二つ以上のコンテンツをリンクしても、アップル社のコンピューターは一つしか、iTunes にリンクを作成してくれないからである。

iTunes Store の podcast に登録された場合、ePub や PDF はどのようにダウンロードされるのだろうか。ファイル自体は Seesaa のサーバーにあり、iTunes はリンクをたどってファイルをユーザーのパソコンに移動するのである。iTunes は本来、音楽を管理するソフトウェアであり、iTunes 上でクリックした作

品は、マイミュージックの幾層も下のフォルダにダウンロードされるのである。

要するに、マイミュージック ↓ iTunes ↓ iTunes Media ↓ podcasts ↓ 当該のフォルダの下に、ファイルが入るというわけである。なお、ePub の場合、Internet Explorer でダウンロードすると拡張子が zip となるので、それを epub に変更してもらう。

電子本が「マイミュージック」にダウンロードされるなんて事情は、多くの人には知られていない。したがって、その辺の説明は電子本をリンクするブログで、必ずしておいた方がいいだろう。

さて、電子本の作成から公開するまで、僕が知る限りの情報はすべて述べた。不明な点があれば、インターネットで検索していただきたい。今回、作成した電子本は、ここで述べてきたように、Seesaa の僕のブログ (<http://takanotsushi.seesaa.net/>) に連載した記事をもとにした。皆さんもぜひ、自身の電子本をインターネットで公開して、情報を発信する喜びを味わってみてください。

第四版においては、「二太郎²⁰¹³」で対応した ePub の「固定レイアウト」や、アマゾンの読書端末 Kindle 用の mobi ファイル、プレミアム版についている読み上げ用アドイン「詠太」などについて加筆した。

二〇一三年三月三十日

高野敦志